

# 「蜻蛉日記」への一考察

——呼称から見る作者の意識と性情——

三十六回卒 村山 薫

「蜻蛉日記」は右大将道綱母が天曆八年（九五四）から天延八年（九七四）まで、約二一年間の事柄を書き綴った作品である。その内容は高貴な男の妻が果たして幸福であるかという問題提示であり、主として夫、藤原兼家との愛憎の記録であると言えよう。道綱母は藤原家の貴公子兼家の一妻妾となり、一子道綱を生んで、はかない身の上ながら、それなりの幸福を得る。しかし夫の他の女性への傾斜に身を砕く程煩悶し、それが裏目に出て夫は益々遠ざかる結果となる。この様な「我身のはかなさ」言わば「薄幸さ」を「かげろふ」に託して、作者は延々と筆を進めていったのである。

ところで、この作品を読み進んで行くと、ある特徴的な表現に気付く筈である。それは作者が自分の周囲の人物に与えている呼称である。彼女は身近な人物を明確にする事を殆どせず、例えば兼家は文章中にその主語を省略される事が多く、また明記される場合でも「人」「わがしる人」の様な主観的な呼称、「東宮のすけといひつる人」の様な客

観的な呼称等、様々に書かれている。更に自他を問わず「連体修飾語十人」類の呼称を各人物に与え、場面によって様々に使い分けており、何かしらの意図を窺う事が出来る。従って作品中の呼称を丹念に調査する事で、作者の奥に秘めた意図、感情等が明らかになるのではないかと考えるに至った。ここでは作者にとってより重要な人物である兼家、作者の家族、道綱の三人の呼称から考察して行きたいと思う。

(一)

前述した様に作者は各人物の呼称を著す場合、その場面ごとに異なった描き方をしている。これらは全く何の意図も無く書き綴られているのか否か、全巻を通じて記述されている兼家の呼称について検討することにした。

作者の夫である兼家の呼称は、上巻二九、中巻二九、下巻三六、合計九四例作品中に明記されている。この中で三巻を一貫して表記されているのは「人」一例のみであり、

他の呼称からも抽んで数が多く、兼家を示す代表的な呼称であると言うことが出来る。この語は、特に夫への不満や愛情の従足された場面に表記されており、彼女が「人」に愛情の対象の意を込めていたことが窺える。つまり「人」は、普通主語を省略される程この作品の中心に位置している兼家を強く表現する為の、一種の甘えを含んだ言葉であると言えるだろう。

一方、兼家を示す呼称には「連体修飾語十人」類のものもあり、「今日みえたりし人」「あさましき人」等様々に表現しているが、その中であって「人」と同様に、作者の兼家に対する甘えを表現したものととして「くすべき人」という要求口調呼称が挙げられる。この要求口調は兼家のみ見られるものであり「ものかたらひをきなどすべき人は、京にありければ」「とふべき人はをとづれもせず」等、兼家の不在や訪問の無い事への憤りを示した場面に使用されている。つまり作者はこの呼称を用いる事によって、夫への不満、或は作者のエゴイズムを示すと同時に、兼家が作者にとって特別な存在である事を示しているのである。

従って視点を變えて見れば、作者は兼家が自分の夫であったが故にこの様な呼称を用いたのであり、兼家が床離れをして事実上夫婦を解消した後は、その呼称も何らかの変化をする可能性が考えられる。事実、下巻で作者が広幡中川に転居して兼家の通いが絶えると、要求口調呼称と兼家の基本的呼称である「人」は全く用いられなくなるのである。これらの呼称は、作者が兼家を「夫」として強く

意識した場合に使用されるものであり、床離れ以後の事実上夫婦を解消した相手に用いる事は、世間的にも作者の自尊心からも許されなかったと思われるのである。

これに対して、下巻の床離れ後に急増しているのが「殿」の呼称である。この語は出現数一八例中、一一例が床離れ後に集中している。但し作者自身がこの語を用いる事は手紙中の一例しかなく、主として侍女や兼家の弟の遠度が会話中で用いている事から、これは儀礼的社会的呼称であり、作者の心情を直接反映したものではない事を考慮すべきである。しかし、この呼称が多用される事によって、兼家が志賀の姫や道綱の父として強い影響力を持ち、また作者との繋りが断絶した訳ではないことが明らかにされているのである。従って「殿」の呼称はもはや夫婦ではない夫を描く際の、「人」を補う役割を果たしていると言えるだろう。

以上の様に兼家の呼称に関して言えば、場面ごとに書き流されてはいるものの、全体的に見ると床離れを契機に作者の意識変化が明確に現われていると感じられる。つまり作者が呼称を明記する際に最も影響を与えるのは作者の相手に対する心理、又相手に対する立場であって、これらに他の要素が作用して呼称が決定されると見るべきであろう。従って某人物に対する呼称は、作者の心理状態に従って変化して行く可能性を含んでいる。蜻蛉日記において呼称は、それ自身で道綱母の他人物への感情を表わしており、呼称を検討することで作者の人物評価がある程度判明すると言

うことが出来よう。

(二)

では作者が最も頼りにしている家族は如何に表現されているだろうか。当時の女性一般に言える事だが、結婚生活が不安定だった作者にとって、最終的な心の拠所となつたのは家族であつた。日記中でも兼家の愛の不足を嘆く記述と前後して、家族、特に父親への依頼心を記す場面が多く現われている。呼称もこの傾向を保っており、父の場合その統柄を明示する事は殆どなく、「連体修飾語十人」の形をとつた「たのもし人」「我たのむ人」等の作者の心情を反映した呼称の占める割合が非常に高くなつていたのである。しかし、これら家族の呼称に一つ不可解なものがある。

それは「をやとおぼしき人」の様に、家族の統柄の下に推量の意味を持った語を付している事である。この「おぼし」表現には如何なる意味が籠められているのであるうかこの「おぼし」表現は父、兄、妹に用いられているが、統柄を全て臚化されている父と、一部臚化の兄妹とを分けて考察して行くことにする。

父倫寧の呼称に「おぼし」が使用されたのは、上巻の冒頭、兼家の求婚の場面での一例のみである。

「これはをやとおぼしき人に、たはぶれにもまめやかに、ほのめかししに、(上巻大曆八)」

前述した様に作者は父親の呼称を記述する場合、依頼心を前面に押し出して、父親であることを臚化する傾向があ

るので、この場面でもそれを踏襲していると言えるだろう。但し一つ疑問なのは、「たのもしき人」等の呼称が基本的に父親を表わすのに、何故この場面だけ「おや」という統柄を明示しているのか、という事である。この場面で統柄を明示しなければならない理由でもあつたのだろうか。

これに対する一つの答えとして、兼家と作者の結婚が正当なものであつたと印象付ける為に作者が父の存在を明示したという事が言えるかもしれない。工藤重矩氏によると作者の結婚に至る過程は正式なものではなく、<sup>(注)</sup>また確かに作者も兼家の求婚が「案内するたより」「なま女」等を介しない異常なものだつたと語っているが、それなら尚の事、彼女の結婚を決定するとみなされる<sup>(注)</sup>父の存在を明確にする必要があつたのではないだろうか。その後頻出する「まめやか」も、兼家の誠意を印象付ける為だと言われているが、<sup>(注)</sup>父親の明示も同様の意図で為されたと思われる。この時期の記述が「まめやか」な雰囲気であればある程、作者の後の悲劇が明確になる事を、私達は考慮しなければならぬだろう。

では何故「おや」に「おぼし」が付されているのだろうか。一見すると「おぼし」は折角明示した「おや」の印象を弱めている様であり、無意味にも思える。先ず、この場面を再検討してみると、兼家の求婚は上巻の序に続く重要な記事であり、作者の筆も最も緊張している時期である。蜻蛉日記の冒頭は物語的であると云われるが、<sup>(注)</sup>この求婚の時期もその傾向を保っている事は充分に考えられる。

これを呼称の面から見ると、普通「人」と表記される兼家は「柏木の木高きわたり」であり、父、兼家共に後の基本的な呼称からは掛け離れた書き振りののである。従ってこの場面は、呼称の点から言うの特異な世界であり、全体的により醜化した形跡が見られるのである。つまり父親に対する「おぼし」表現は、日記の冒頭での作者の緊張と人物を全体的に醜化する傾向の下で行われたのであり、敢えて言うなら「物語的手法の一端」<sup>(註)</sup>であると言えらるだろう。

一方、兄妹に対する「おぼし」表現は、作者が兼家や兼通等の他の人物に文を送る際の前提として記されている。この場合の文は主として恋文、或は恋文に対する返事であり、兄妹は作者の消極的な態度を諷め、行動を促す役割を果たしているのである。これは作品全編を通して言えることであるが、作者は兼家に文を送ったりする愛情表示をあまり表面に出そうとはしない。つまり自分の意思で行動するのではなく、侍女や家族等の周囲の強い勧めによって初めて行動を起す形態を取るのである。従ってどの様な場合でも、作者は自分の行動に対する読者の批判をかわすことが出来るのであり、これは日記を執筆するにあたっての自己を擁護する意識の現われだと言ふ事が出来る。だがその際、読者の不信が家族に直接向くことは、作者の希望する事ではない筈である。確かに家族への責任転嫁は自己を擁護する為であったには違いないが、その根底には自分と兼家の生活をより効果的に、又より印象的に描きたいという純粹な心理が働いていたのであり、それによって家族に

何らかの影響を与えることは作者としても避けたかったと思われる。その為に成されたのが呼称への醜化法であり、これは作品に利用した家族への一応の配慮と見てよいであろう。

以上の様に家族に対する「おぼし表現」は日記執筆に際しての操作、自己弁護の為に使用されたものが多かった。家族がその対象となったのは、彼等が作者の周辺に位置し、彼女が甘えられる立場にあったからである。だが彼女は利用した家族を確実に醜化して、反感等が向けられない様に留意していたと思われる。彼女がこの様な技巧を凝らしたのは、兼家と自分の愛の軌跡をより良く表現する為に、周囲の人々を最大限に利用しようとした意志の表れであろう。それは換言すると、蜻蛉日記自身が、如何に兼家を中心にして回っていたかを示す一端なのである。

(三)

次に作者の息子である道綱の呼称について見て行くことにする。道綱は作者の唯一人の子供として惜しめない愛情を注がれた事が作品からも窺え、事実、その呼称出現数も17例と登場人物の中で最も多くなっている。その中には「二なく思ふ人」「我思ふ人」等溺愛とも言うべき感情を「人」に冠した呼称も見られる程であるが、「蜻蛉日記」全体に作者の道綱への愛情が満ちているかという点、必ずしもそうは言えない様である。こゝでは特に道綱への言及が多い中巻の記述を中心に考察して行く事にする。

中巻での道綱に関する記事の中心は、道綱の内裏の賭弓出場であると言う事が出来よう。この記述は作者の力の入れようが尋常ではなく、道綱が射手と無人に選ばれた事から始まって、舞の練習、当日の様子、後日の晴れがましき等が、「うれしきことぞ、ものこき」「あやしきまでうれし」等の言葉と共に実に生き生きと記されている。だが、この記述の道綱自身の影は非常に薄く、ここには自分の技を誇り喜ぶ道綱の姿も、又それを嬉しげに母に語る姿も全く語られていないのである。これに対して強く前面に押出されているのは、息子の成功を感激して語る兼家の姿である。つまり作者は道綱の成長の喜びを語っている時でも、その背後に常に兼家の存在を示しているのであり、(注。むしろ兼家を中心に語っていると言っても良い程なのである。作者にとって道綱の榮譽が喜びであるのは言うまでもないが、それ以上に息子によって齎らされる兼家の訪れと愛情の方が嬉しかったのだと考えられる。

事実、作者はこの場面で、兼家に対して特殊な筆使いをしている。作者は兼家を描く場合、会話は別として殆ど敬語を使用しないのであるが、全体として「る」「らる」の尊敬用語が一七例みられる。(注。)この場面では「かへすがへすも泣く泣く語らる。」等の様に、十七例のうち四例が集中しているのである。これらの尊敬表現は上巻の兼家と章明親王との唱和等にも見られるが、その他の用例は殆ど、兼家が作者及び道綱に懇切な部分、言わば幸福な事件と共に現われているのである。従って尊敬表現が三例も集中し

ている賭弓の記述は、作者と兼家の結婚生活の中でも、最も幸福な事件の一つであったと思われる。従って中巻での道綱の榮譽の記事は、即ち兼家の作者に対する態度、愛情を描く事に費されていると言えるであろう。

次に中巻での今一つの特徴として、作者が道綱を「ほだし」(死、出家の妨げとなるもの)として見なす事が非常に多い、という事が挙げられる。道綱の呼称を明記して「ほだし」視したのは全体で六例みられ、そのうち上巻一例、中巻五例となっている。上巻の記述は作者が母の死に際して人事不省に陥った折のものであるが、この記述には中巻の様な悲愴感はなく、兼家の不実を嘆きながらも、肉親を失った悲しみの方を前面に出しており、その印象は薄いと云えるだろう。だが中巻の場合は、兼家の夜離れが頻繁であるだけに深刻である。兼家が「かくてかぞふれば、夜みることは三十よ日、晝みることは四十よ日になりけり」となった後の記述は

なをいかでこころとしてしにもしにしがなと思ふよりほかのこともなきを、たゞこのひとりある人をおもふにぞ、いとかなしき。(中巻・天禄元年)

の様に深刻さを増して行く。特にこの記述に続く場面では、作者の出家の意志に従って道綱も出家の意志を示し、可愛がっていた鷹を放つ場面は哀れを誘うが、作者の道綱へのこの様な気持ちは、単に母が息子を思う気持ただけではないと思われる。これらの記事は兼家の夜離れから鳴瀧山籠ままでに集中しておりそれ以後は下巻を含めて見られなくな

る。つまり、道綱を「ほだし」視する記事がしばしば現われるのは、作者が兼家との愛憎の生活に喘いでいた時と重なるのである。

作者がこの時期出家の希望を漏らし、愛児の姿を見て思いつまらざることを繰り返すのは、兼家との関係から見ても当然であろう。だが彼女に出家まで思い詰めさせているのは兼家であり、その血を分けた道綱を見て翻意するというのは、反面作者の兼家に対する愛執を物語ってはいないだろうか。実際作者は鳴瀧籠りを決行するが、出家までに至らなかったのは道綱の存在よりも、兼家が自分を見捨てたのではないことが判明したからである。従って作者が道綱を「ほだし」視すればする程作者の兼家に対する執着は強かったと言えるのである。

作者が道綱を一人息子として溺愛したのは、彼に対する名称、歌の代詠などから容易に想像出来る。しかし、少なくとも作者が日記に表現した範囲では、彼は兼家を描く際の端緒、手段として利用されているに過ぎない。道綱が日記記述の中心となることは、殆どないといっても良い程である。この日記の核はあくまでも兼家であって、道綱は彼を引き立たす役割を果たしているに過ぎないのである。

(四)

以上、主に兼家、作者の家族、道綱の呼称及び位置について検討・考察して来たが、これらの蜻蛉日記における意義は想像以上のものであった。作者は呼称を使って、その

人物への評価を明確にもし、又記述の主旨を効果的に表現しようとしたのである。これらの操作は兼家の妻妾、作者の家族達に顕著であるが、特に道綱の場合は兼家を描く端緒として技巧的に用いられているのである。

作者は数多く道綱に言及している。それはそれは兼家との不和を粉らす為の溺愛であると私は当初考えたが、日記中の道綱への筆致は淡泊であり、記述の中心は常に兼家が占めているのである。つまり日記中での道綱の登場は殆ど兼家の動行、作者との消息往来を述べる為に費されているのであった。日記中での道綱は兼家を描く手段としてしか母親に扱われないのである。

これは程度の差こそあれ、他の人物にも言えることであろう。蜻蛉日記の記述の中心が兼家であることは、その呼称が省略されたり「人」で表わされている事からも窺えるが、他の人物も兼家を婉曲に表現する為に記述されている場合が多いのである。作者はこの作品を「身の上のみする日き」であるとしているが、それは結局自分の結婚生活つまり兼家を描く事であった。従って彼女はその為に、あらゆる人々を最大限利用し、兼家を中心に作品を構築していったのである。

確かに作者は兼家の不実を非難し、彼への不満を縷々述べてはいるが、彼女の心情はそれだけではなかった筈である。むしろ他の人の力を借りて描き出される兼家、特に道綱に託して描かれる愛情の充足と兼家への愛執がストレートに述べられていない分だけ、より強く道綱母の心情を物

語っていると云えるだろう。それは、作者が蜻蛉日記で強く主張したかったものの一つであると思われるのである。

(注1) 「二夫一妻制としての平安文学

— かげろふ日記と源氏物語 —」

工藤重矩氏 「文学」 S 62・10月号 岩波書店

(注2) 注1と同じ

(注3) 注1と同じ

(注4) 『蜻蛉日記』序跋考

今西祐一郎氏 「文学」

S 62・10月号 岩波書店

(注5) 「蜻蛉日記解釈大成」(一)

上村悦子氏 明治書院

(注6) 「蜻蛉日記研究序説」

伊藤博氏 笠間書院

(注7) 新潮日本古典集成「蜻蛉日記」 解説・犬養廉氏、新

潮社

